『 On-line みんなで法華経を学ぼう！ 』 vol.13

Apr.2023

―― Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

（みんなで"法華経観"を見つける旅に出よう）

『妙法蓮華経 五百弟子受記品 第八』 （迹門・正宗分）

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 （法師品 二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 （方便品 八十二頁 四行）

○ 「習学」の３つのステップ 「聞解・思惟・修習」

（『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』） （法師品 二〇九頁三行）

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 （法師品 二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 （『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行／P5・1行）

※ 表記 例：(P353・1行／P259・7行) ⟹ （『新釈・文庫版』頁数／『新釈・単行本』頁数）

◇ ◇ ◇

＜化城諭品の復習＞

・今日をたいせつにせよ (P237・終3行／P180・終3行)

もし今日のわが身・わが心・わが行いを**「濁(にご)す」**ようなことがあれば、かならずその**「下流まで濁り」**が及び、もしわが身・わが心・わが行いを**「清め」**れば、かならずその**「下流も澄(す)んで」**きます。

『魔軍を破し已って阿耨多羅三藐三菩提を得たもうに垂んとするに、而も諸佛の法現在前せず』 （一五五頁 二行）

・魔軍を破するとは (P243・終6行／P185・終3行)

魔軍というのは、人間の心の深層にひそむ迷いの集積であるとされています。

・出家の意義 (P253・4行／P193・終5行)

真理の追究に徹するためには、多かれ少なかれ俗生活を犠牲にしなければならなくなります。

～　お釈迦さまの出家を**『大いなる放棄･ほうき』**と呼んでいます。

･現代の出家　(P255・終5行／P195・5行)

人を幸せにし、世の中を幸せにするためには、多かれ少なかれ自分の五欲の楽しみを犠牲にしなければなりません。自分も精一杯官能を満足させ、そのうえで人をも救いたいというのは、むしがよすぎます。

･在家の出家　(P256・終6行／P195・終2行)

生活のなかにおいて、仏さまの教えをよく守って正しい生き方をすると同時に、ひと時、利己心を捨てて、なんらかの形で人のため世のための奉仕をする・・・ これが以前から私の主張する**「在家の出家」**にほかなりません。

・『衆生は常に苦悩し 盲冥にして導師なし 苦盡の道を識らず 解脱を求むることを知らずして 長夜に惡趣を増し 諸天衆を減損す 冥きより冥きに入り 永く佛の名を聞かず』　(一五七頁 一行)

･解脱を求むる　(P264・2行／P202・1行)

本当に苦しみから解脱する道は、心を改造し、根本の迷いを去るよりほかにはないのですが、それを求めようとはせず、ただ目の前の苦しみから逃れることにあくせくしているのです。

･『業』は未来のためのもの　(P282・1行／P215・5行)

よい業を積めば積むほど、自分はよくなってくるのだという原理がわかりますから、これから大いに善業を積もうという決意が起こります。

・『其の中の衆生各相見ることを得て、咸く是の言を作さく、此の中に云何ぞ忽ちに衆生を生ぜる』(一五八頁 五行)

「諸法無我」の教えがわかると、他人の尊さを認識し、深い仲間意識を感ずるようになります。したがって幸福な人間に変わってしまうのです。**「孤独地獄からの解放」**です。

・『深禪定の樂を捨てたることは 佛を供養せんが爲の故なり』(一六〇頁 六行)

天上界での静かで安らかな生活を捨ててここに参りましたのは、仏さまに帰依と感謝のまことを捧げ、教えを頂くために来たのです。

･創造が人生の喜び　(P297・終4行／P228・5行)

創造には必ず苦心がいります。苦労が必要です。ところが、創造の苦心・苦労は、積極的な苦心・苦労ですから、楽しみがそれに伴います。

・『極樂百年の修行は穢土一日の功に及ばず』　**(報恩抄)**

･衆生の眼となる　(P313・3行／P241・7行)

『衆生の爲に眼（まなこ）となり』・・・大変いい言葉です。応身仏の教えの最大の目的は、衆生に本当の〈ものの見方〉を悟らせてくださること。～ それが根本の救いにほかなりません。

･宿福の慶　(P314・2行／P242・3行)

仏さまに会いたてまつることができたのも、いままで善い行いをして徳を積んできたお陰。

『我等宿福の慶あって 今世尊に値いたてまつることを得たり』(一六三頁 一行)

・『佛に從いたてまつりて法を聞かずして 常に不善の事を行じ 色力及び智慧斯れ等皆減少す』　(一六八頁 一行)

仏に仕えて教えを聞くことが無いため、常に善くないことを行い、そのために体力も智慧も減って行くばかり。悪業を積んでいくために幸福を失い、真の幸福を願う心さえも失って行く。

・『罪業の因緣の故に 樂及び樂の想を失い 邪見の法に住して 善の儀則を識らず 佛の

所化を蒙らずして 常に悪道に堕つ』(一六八頁 四行)

罪の行い繰り返すために幸福を失い、真の幸福を想(おも)うことさえもなくなり、間違ったものの見方、考え方に固まり、善の見本さえ見ることもできません。

・『佛は世間の眼と爲って 久遠に時に乃し出でたまえり 諸の衆生を哀愍したもう故に世間に現じ 超出して正覺を成じたまえり』 (一六八頁 四行)

・結願の文 (P352・5行／P274・2行)

『願わくは此の功德を以て 普く一切に及ぼし 我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん』。

・十二因縁 (P364・5行／P283・終3行)

われわれ肉体がどうして生まれ、成長し、どうして老死に至るかという因縁の関係を十二の段階に分けて説き、心の変化にもそれと同様な原因・結果の法則があることを説かれたもの。

①無明⇒②行⇒③識⇒④名色⇒⑤六入⇒⑥触 ⇒⑦受 ⇒⑧愛⇒⑨取 ⇒⑩有⇒⑪生⇒⑫老死

・貪欲・差別は新しい病気 (P379・終2行／P294・終5行)

・妙法蓮華・教菩薩法・仏所護念 (P390・終3行／P303・6行)

〈妙法蓮華経〉 俗世にいながら、人格完成しつつ、世を完全平和する道を説く教え。

〈教菩薩法〉 菩薩を教化されるために説かれた教え。

〈仏所護念〉 仏が久遠の昔から護り念じてこられた、大切な法。

・示・教・利・喜 (P400・終3行／P311・3行)

教えを説き、人を導いて行く合理的な順序です。

〈示〉第一に教えのあらましを示します。

〈教〉相手が「なるほど、良さそうな教えだ」と心を動かして来たら、もっと深く教えの意味を説いてあげます。

〈利〉教えの内容をほぼ理解できたと思われたら、次に、教えを実践して『利益・りやく』を得るように導きます。

〈喜〉そうなると人は、教えを保ち続けることに喜びを感じ、生きがいを覚えるようになります。

以上が、人を仏法に導く基本的な原則であって、この順序を踏んでいけば、まず間違いありません。

・『第十六は我釈迦牟尼佛なり。娑婆國土に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり』 (一七三頁 終四行)

・縁に引かれて仏法を学ぶ (P422・3行／P329・1行)

よりによって第一の〈大乗仏教国〉である日本に生まれたということが、まずもって大変な縁です。しかも、そのなかで諸経の王である『法華経』を学ぶようになったとなると、これはいよいよ〈有難い〉縁だと言わなければなりません。

『世世に生まるる所菩薩と**俱**にして』(一七二頁 終二行)

・『爾の時の所化の無量恒河沙等の衆生は、汝等諸の比丘及び我が滅度の後の未來世の中の聲聞の弟子是れなり』 (一七四頁 三行)

・『唯佛乘を以て滅度を得、更に余乘なし。』(一七四頁 終五行) (P429・終3行／P334・6行)

・化城宝処の譬え (P438・6行／P340・終3行)

・『是の本因縁を以て 今法華經を説いて 汝をして佛道に入らしむ 慎んで驚懼を懷くこと勿れ』(一八〇頁 六行) (P470・2行／P368・2行)

昔からの因縁があればこそ、いま最高の教えを説いて、いよいよ仏の智慧へ入らしめようとし

ているのですから、決して尻込みすることはありません。

・世のリーダーの資格 (P472・4行／P370・1行)

・『強識にして智慧あり 明了にして心決定せり 険きにあって 衆難を済う』(一八〇頁 終三行)

・**リーダー**としての三つの**「資格」**です。

〈強識・ごうしき〉 知識・経験が豊富。

〈明了・みょうりょう〉 賢明であること。

〈心決定・こころけつじょう〉 決断力がある。

・仏道修行は人生修行 (P483・6行／P379・4行)

長い険しい道というのは「人生の旅路」です。その旅路は、辛いことに満ち満ちています。人間は誰しも「苦」を厭(いと)います。～ **仏道修行と人生修行とは別物ではないのです。われわれの日々の実生活が、すなわち仏道修行にほかならないのです。**

・『既に是れ息み已んぬと知れば 佛慧に引入したもう』 (一八二頁 終二行)

そして人々が『安心の境地』であり、『人生苦から救われた』ということを実感できたならば、その時はじめてその人は真の救われである**『仏の智慧』を得る道**へと導かれるのであります。

(P481・3行／P377・終4行)

◇ ◇ ◇

＜五百弟子受記品のあらすじ＞

【『化城諭品』一八二頁 一行】 仏弟子の私たちと仏さまとの**『宿世の因縁』**を釈尊から教えていただき、大導師・仏さまが凡夫の心を見通す絶妙な導き方をして下さるという大徳を感じ、一同は得も言えぬ有り難い気持ちになりました。そして、『こうして有り難い“安堵感”を覚えるだけで、その人は真の救われである**『仏の智慧を得る道』**にすでに入っているのだ(『既(すで)に是(こ)れ息(やす)み已(おわ)んぬと知れば 佛慧(ぶって)に引入(いんにゅう)したもう』)』ということを釈尊からお教えいただき、一同はさらに大きな感動を覚えたのでした。

【感動した富楼那が仏さまを供養する】――

【一八三頁 一行】 その時、十大弟子の一人で**『説法第一』**と称せられていた**富楼那(ふるな)尊者**、すなわち**富楼那弥多羅尼子(ふるな みたらにし)**は、智慧に満ち溢(あふ)れた世尊の説法を伺ったことと、『譬諭品』や『授記品』で舎利弗(しゃりほつ)や四大声聞らに対してなされた授記を目(ま)の当たりにし、そして先の『化城諭品』で自分たちが仏さまと**「過去世からの尊い因縁」**があること、さらには仏が自由自在な神通力を具えておられることに、これまで経験したことのない心躍る深い感動と感激を覚えました。そして仏さまの御前(おんまえ)にまかり出て、額を仏の足につけて礼拝し、そののち一歩退(しりぞ)いて仏さまの尊いお顔を仰(あお)ぎ見、まじろぎもせずにじっとしました。

【富楼那が仏さまの徳分を讃歎】――

【一八三頁 五行】 そして**富楼那(ふるな)**は、心のなかでこう思うのでした。

「世尊は計り知れなく尊いお方だ。あらゆる人々に的確な方便を用いて教えを説き、／(『衆生處處(しょしょ)の貪著(とんぢゃく)を抜出(ばっすい)したもう』) 衆生を『貪欲と執着』か

ら解き放ち救ってくださる。そのような仏の功徳の素晴らしさは言葉をもって表現することはできない。／（『唯佛（ただぶつ）世尊のみ能（よ）く我等が深心（じんしん）の本願を知（しろ）しめせり』）我々は世尊にすべてをお任せしよう。なぜならただ世尊だけが私たちの心の奥深くにある本当の願いをご存知でいらっしゃるからだ」

【世尊が富楼那の徳（人を正しく導く『説法第一』の徳分）を讃える】――

【一八三頁 終二行】すると**世尊**は、その場にいる多くの比丘たちに向って、こう言われました。

「**富楼那**(ふるな)は／（『其（そ）の説法人の中に於て最も第一たりと称し』） 仏の教えを説く者のなかで最も優れた説法者です。それゆえ**『説法第一』**と讃えてきました。富楼那はこれまで私の教えをしっかりと護持し、／（『能（よ）く四衆（ししゅ）に於て示教利喜（じきょうりき）し』）その教えが正しく世に広まるように**『示・教・利・喜』**の順序で人々に法を説き示し、多くの人々に大きな利益を与えてきました。／（『如來を捨（お）いてよりは、能（よ）く其の言論（ごんろん）の辨（べん）を盡（つ）くすものなけん』）如来以外には富楼那ほど正法に基づく説得力を持つ者はいません。みなさんは富楼那がこの世においてのみ私を助け、法を説き弘めていると思うかもしれませんが、じつはそうではありません。富楼那は今世ばかりでなく、過去世においても九十億にも及ぶ無数の仏のもとで正法を護持し、／（『彼（か）の説法人の中に於ても亦（また）最も第一なりき』）この世界においても富楼那は、教えを説き弘める説法者の第一人者でした」

【一八四頁 三行】「（『又（また）諸佛所説（しょせつ）の空法（くうぼう）に於て明了（みょうりょう）に通達（つうだつ）し』） 富楼那は諸仏が説く**『空』**の教えを明確に完璧に理解しており、その教えを人々に説くうえで、**『四無礙智**(しむげち)**』**という四種類の自由自在な説法力を具えています。過去世においても常に教えを解りやすく、かつ、清らかな心で教えを説き、人々が疑惑を起こすことなど全くありませんでした。／（『菩薩神通の力を具足し、其の壽命に隨（したが）って常に梵行（ぼんぎょう）を修（しゅ）しき』）そればかりか富楼那は、**『菩薩』**としての大神通力を身につけ、寿命のある限り心身を清くして修行精進しました。／（『彼（か）の佛世の人咸（ことごと）く皆、之（これ）を實（じつ）に是（こ）れ聲聞（しょうもん）なりと謂（おも）えり』）そして**『菩薩』**の身であるにもかかわらず、**わざわざ方便力を用いて自らを『声聞』のごとく立ち振る舞い**、そのため人々は富楼那を身近な『声聞』であると思い、／（『而（しか）も富樓那は斯（こ）の方便を以て無量百千の衆生を饒益（にょうやく）し、又無量阿僧祇（あそうぎ）の人を化して阿耨多羅三藐三菩提を立てしむ』）その結果、無量阿僧祇と言うはかり知れない数の衆生は、多くの利益（りやく）を得ることができたのでした。そればかりか衆生は、最高無上の悟りを得ようという心を起こすのでした。このように富楼那は、世界を清らかに美しくするために常に仏の聖行を実践し、衆生を教化しました」

【一八四頁 終二行】「比丘たちよ。富楼那は過去の七仏のもとにおいても説法の第一人者、**『説法第一』**であり、現在においても同じく**『説法第一』**であり、未来世においてもあらゆる諸仏のもとにおいて**『説法第一』**であります。そして仏の聖行を助け、教えを説き弘めて行くでしょう。そればかりか富楼那は未来世に於いて無数の仏の教えを護持し、数知れぬ多くの人々を教化して大きな利益（りやく）を与え、人々は無上の悟りを求める志を起こさしめるのです。そして世界中を美しく清らかにするために一生懸命精進し、衆生を教化

していくでありましょう」

【富楼那への授記】――

【一八五頁 四行】「**富楼那**(ふるな)は菩薩の道を完璧に行ない尽くし、無量阿僧祇劫（あそうぎこう）という長い時を経て、仏と成ることでありましょう。仏の名は**『法明**(ほうみょう)**如来』**と言い、ガンジス河の砂の数ほどの多くの国々を、分け隔（へだ）てのない一つの国とします。その国は美しい七宝（しっぽう）で作られ、地形の高低などなく、まるで手のひらのように平らかで山や谷、溝（みぞ）などありません。七宝で作られた宮殿は地上から浮かびあがり、／（『人・天（にん・でん）交接（きょうしょう）して両（ふた）つながら相見（あいみ）ることを得ん』）人間界の者は天上界を間近に見ることができ、一方、天上界の者は人間界を見ることができるようになります。そして天上界と人間界の人たちが交流し合うのでした。」

【一八五頁 終三行】「その世界には『悪の道』はなく、また男女の差別もありません。一切衆生はみな素晴らしい精神性を持つ人間として生まれ変わり、淫（みだ）らな欲などありません。人々は素晴らしい大神通力を身につけ、全身からは常に光明を発し、／（『飛行自在（ひぎょうじざい）ならん』） あらゆる所へと飛んで行ける囚（とら）われのない自由自在の身となるでありましょう。そして、仏の道を実践する決意と志は大変固く、一心に精進してすぐれた智慧を得、金色（こんじき）に輝いて仏の三十二の徳相を具えるのでした」

【一八六頁 一行】「（『其の國の衆生は常に二食（にじき）を以てせん。一には法喜食（ほうきじき）、二には禪悦食（ぜんねつじき）なり』） その国の人々の食べ物は二つだけです。一つは**《法喜食・ほうきじき》**といって『法を聞く悦び』。もう一つは**《禅悦食・ぜんねつじき》**という『法を修行する悦び』です。この**《法喜食・禅悦食》**を食物としたのでした。／（『無量阿僧祇（あそうぎ）千萬億那由他（なゆた）の諸（もろもろ）の菩薩衆あり、大神通・四無礙智（しむげち）を得て善能（よく）衆生の類（るい）を教化せん』） その国には、無量阿僧祇（むりょう あそうぎ）千万億那由他（なゆた）というはかり知れない数の菩薩がおり、みな大神通力を具え、教えを自由自在に説く智慧を持っています。そして菩薩たちは大いなる徳で人を感化する力を具えており、的確に衆生を教化します。そういう菩薩が国中に充満しています。

【一八六頁 六行】「**『法明如来・ほうみょうにょらい』**の国は、以上のように計り知れない功徳で充満し、荘厳に美しく輝いています。時代の名は**『宝明・ほうみょう』**、国の名を**『善浄・ぜんじょう』**と言います。そして仏の寿命は無量阿僧祇劫（あそうぎこう）というはかり知れない長い期間であり、その教えも大変長い期間にわったって残って行きます。そして仏が入滅した後、七宝で作られた仏塔が国の至る所で建立（こんりゅう）されます」

【以上のことをあらためて偈を以て説く】――

　すると世尊は、以上の意味を重ねて説くために**『偈』**をお説きになりました。

【(偈)一八六頁 終三行】「諸々の比丘たちよ。よく聞きなさい。／（『佛子所行（しょぎょう）の道（どう）は 善（よ）く方便を學せるが故に 思議（しぎ）することを得（う）べからず』） 真の仏弟子というのは、人に応じ、場合に応じてさまざまな手段を用いて導くことに精通していますが、その内容はとても人知の及ばない不思議に満ちたものです。大衆は安易にとりつきやすい初歩的な教えを好み、深い智慧をむしろ敬遠するものです。／（『諸（もろもろ）の菩薩 聲聞・縁覚と作（な）り 無数（むしゅ）の方便を以て 諸の衆生類（るい）を化（け）して』） そのことを菩薩

は知っていますので、まずは、自らを一段下げて声聞や縁覚の姿となって現わし、さまざまな手段を用いて多くの大衆を教化して行くのです。／（『自（みずか）ら是（こ）れ聲聞（しょうもん）なり 佛道を去ること甚（はなは）だ遠しと説く ～ 小欲懈怠（けだい）なりと雖（いえど）も 漸（ようや）く當（まさ）に作佛（さぶつ）せしむべし』）そして『自分自身はまだ声聞の身であって、まだ本当の悟りには程遠い』と言って大衆の立場に降り立ち、小法を欲して大乗の教えを求めることを怠（おこた）る人々をたくみに救い、無数の衆生を次第次第に仏の悟りへと導くのであります。ですから自分は実際に**『菩薩の行』**を実践しているにもかかわらずそれを隠し、／（『内（うち）に菩薩の行を秘（ひ）し 外（ほか）に是（こ）れ聲聞（しょうもん）なりと現ず』）表面的には『声聞』であるかのように立ち振る舞うのです」

【(偈)ー八七頁 四行】（『少欲にして生死（しょうじ）を厭（いと）えども 實（じつ）には自（みずか）ら佛土（ぶつど）を淨（きよ）む』）「つまり外見上では、小乗の教えを求めて『人生の変化の苦から解き放たれる』ことを信仰の目的としているように見えますが、**じつは大乗の教えによってこの世を救おうとしている**のです。**『菩薩』**は単に『声聞』の姿として現わしているのではなく、／（『衆（しゅ）に三毒ありと示し 又（また）邪見（じゃけん）の相を現（げん）ず』）ある時は凡夫が**『貪**とん**・瞋**じん**・痴**ち**』**という**三毒**を持っていることを示すために現われることもあり、またある時は間違った考え、つまり**邪見**(じゃけん)を持つ**外道**(げどう)を実際に示すために現われることもあるのです」

【(偈)ー八七頁 五行】「私の弟子はこのように方便を用いて人々を救うのです。／（『種種の現化（げんけ）の事（じ）を説かば 衆生の是（こ）れを聞かん者 心に卽ち疑惑を懷（いだ）かん』）もし私が『菩薩たちは衆生を救うために様々な姿に変えてこの世に現われるのだ』と詳しく説くと、聞く人はおそらく困惑し、**場合によっては疑いの心を抱く**かも知れません」

【(偈)ー八七頁 七行】「じつは今ここにいる**富楼那**は、菩薩の一人です。富楼那は遥（はる）か昔、過去世に於いて千億の仏の元で、自分のなすべき修行を一心につとめました。そして仏の教えを護持し、教えを弘める努力をしました。無上の智慧を得るために諸仏に仕え、常に弟子たちの上位者として精進しました。／（『多聞（たもん）にして智慧ありと現（げん）じ 所説（しょせつ）畏（おそ）るる所なくして 能（よ）く衆（しゅ）をして歡喜せしめ 未（いま）だ曾（かつ）て疲倦（ひげん）あらずして 以（もっ）て佛事（ぶつじ）を助（たす）く』）数多くの教えを聞いて完璧に智慧を身につけ、人々に法を説く時は、何ものにも恐れることなく堂々と自由自在に法を説くことができます。そしていつも人々に喜びを与え、精進の手を抜いたり、怠けたり、あきてしまって精進の歩みを止めるようなことなどありません。富楼那はこのようにして常に仏の聖行を支え、助けて来たのであります」

【(偈)ー八七頁 終三行】「富楼那はすでに大神通力を具え、**四無礙慧**(しむげえ)という自由自在に法を説くことのできる智慧を身につけています。あらゆる衆生の機根を知り分け、常に清浄な教えを説きます。大衆にもよく理解できるように法の正しい意味を説き、千億という数多くの衆生を大乗の教えにとどめました。／（『大乘の法に住（じゅう）せしめて 自（みずか）ら佛土を淨（きよ）め』） そればかりか心から法に帰依できるように導いてきました。富楼那はこうして世界中を美しく清くしてきたのでした。そして未来世においても無数の仏を供養し、教えを護持し、仏の聖行を助けて世界を寂光土へと変えて行くでありましょう。富楼那は常に方便力を用い、法を説くことに何ら畏（おそ）れも障（さわ）りもなく、ついには、／（『一切智（いっさい ち）を成就（じょうじゅ）せしめん』）すべて実相を知る最高の智

慧を成就するのであります」
【(偈)一八八頁 三行】「そして富楼那は多くの如来を供養し、法を護持して、未来世において仏と成ることができるのであります。名は**『法明如来・ほうみょうにょらい』**と言い、国は**『善浄・ぜんじょう』**と言い、計り知れない功徳が充満し、荘厳に美しく輝いています。時代の名は**『宝明・ほうみょう』**と言います」
【(偈)一八八頁 五行】「(『菩薩衆甚(はなは)だ多く 其(そ)の數無量億にして 皆大神通に度(わた)り 威德力(いとくりき)具足(ぐそく)して 其の國土に充滿せん』) その国には無数のはかり知れない数の菩薩がおり、みな大神通力を具え、教えを自由自在に説く智慧を持っています。菩薩たちは大いなる徳で人を感化する力を具えており、的確に衆生を教化します。そのような菩薩が国中に充満しています。また仏の教えを学ぶ声聞(しょうもん)たちは計算しても算出できないほど無数におり、しかもすべての声聞は、**六神通**という六つの神通力を具え、**八解脱**という解脱のための禅定に入る八種の能力を具え持つのでした」
【(偈)一八八頁 五行】「その国の衆生は、淫(みだ)らな欲を消え去っており、清らかな精神の持ち主として生まれ変わった人たちばかりです。／(『法喜(ほうき)・禪悦食(ぜんねつじき)にして 更に餘(よ)の食想(じきそう)なけん』) その人々は**《法喜食・ほうきじき》**(法を聞く悦び)と**《禅悦食・ぜんねつじき》**(法を実践する悦び)を食物とし、その他の食物を欲することはありません。。／(『諸(もろもろ)の女人あることなく 亦(また)諸(もろもろ)の悪道なけん』) そして男女の差別なく、すべてが尊い存在として讃えられ、諸々の悪徳など存在しません。富楼那は完全な徳分を具えて、以上の国での如来となるのですが、ここで説く富楼那のすばらしさは、まだ、簡略して説いているにすぎません」

【一八九頁 一行】世尊が以上をお説きになると、それを伺っていた**千二百の阿羅漢(あらかん)**たちは、自由自在な心境になり、一斉に次のように思ったのでした。
「なんと素晴らしいことだろう。こんな感動は今までに感じたことはない。もし舎利弗(しゃりほつ)や摩訶迦葉(まかかしょう)などの大弟子に記を授けられたように、私たちにも**『成仏の保証』**を下さるならば、どんなに嬉しく有難いことか」そう思ったのでした。

【憍陳如(きょうじんにょ)をはじめとする多くの阿羅漢への授記】――
【一八九頁 三行】(『佛此(こ)れ等(ら)の心の所念(しょねん)を知(しろ)しめして』) すると阿羅漢(あらかん)たちの心の中を見抜かれた**世尊**は、僧伽の代表格である長老・**摩訶迦葉(まかかしょう)**に向かって、次のようにお告げになったのでした。
「ここにいる千二百人の阿羅漢(あらかん)たちにも順を追って成仏の保証を授けましょう。まず、私の大弟子の一人である**憍陳如(きょうじんにょ)**比丘は、これから六万二千億というはかり知れない数の仏を供養し、阿僧祇(あそうぎ)劫という長い年月を経た未来において仏となることができます。名前を**『普明(ふみょう)如来』**と言います。身からは常に大光明を放ち、諸々の神通力を具え、その名は十方世界の隅々(すみずみ)にまで知れ渡ります。そしてあまねく全ての人々から敬われ、常に最高の教えである無上道を説き続けます。この意味から**『普明如来』**というのです。その国は清浄で美しく、／(『菩薩皆(みな)勇猛(ゆうみょう)ならん』) 菩薩たちはみな勇猛(ゆうみょう・積極的で勇敢に)精進し、教えを実践することに躊躇(ちゅうちょ)がありません。その菩薩たちは天空にそびえる楼閣(ろうかく)に昇り、そし

て十方世界に赴（おもむ）いて布教伝道し、大きな喜びと感動を覚えながら精進します。また瞬時に本国へ戻って来ることができるという神通力も具えています。**『普明如来』**の寿命は六万劫という大変長い期間で、その寿命の二倍の年数、教えは正しく残り、さらにその二倍の期間、教えの形が残る像法（ぞうぼう）という期間を迎えるでしょう。／（『法滅（めっ）せば天・人憂（うれ）えん』）そしてそののち教えが実践されなくなると、人間界と天上界の人々は苦しみ悩むことになってしまいます」

【一八九頁 八行】「また千二百人の阿羅漢（あらかん）のうちの五百の阿羅漢、すなわち優楼頻螺迦葉（うるびんらかしょう）・迦耶迦葉（がやかしょう）・那提迦葉（なだいかしょう）・迦留陀夷（かるだい）・優提夷（うだい）・阿兎樓馱（あぬるだ／阿那律あなりつ）・離婆多（りはた）・劫賓那（こうひんな）・薄拘羅（はくら）・周陀（しゅだ）・莎迦陀（しゃかだ）などをはじめとする者たちは、みな仏の悟りを得ることができます。そしてみな同じく**『普明如来』**と言い、／（『轉次（てんし）して授記せん』）次々に授記していくことになります。つまりある**『普明如来』**が入滅すると『私が滅度した後、そなたが仏と成るであろう』と順次成仏の保証をし続けていくでありましょう。そして教化する国の様子は、今こうして私が教化している国の様子と同じであり、その仏の国の美しさや仏が具える神通力の内容、菩薩や声聞の様子、そして正法・像法の期間、さらには仏の寿命の期間については、私がこれまでに説いた通りと同じであります」

【方便品で『五千起去』した者たちへも授記】――

【(偈)一九〇頁 終二行】「迦葉（かしょう）よ。今、示した五百人の阿羅漢（あらかん）たちはこのように授記され、とらわれのない自由自在な境地を得ることができますが、じつはその他の声聞たちも、同じような境地を得ることができるのです。／（『其（そ）の此の會（え）に在（あら）らざるは 汝當（まさ）に爲に宣説（せんぜつ）すべし』） そして今、この場にいない者たち、すなわち先に**『五千起去』**した者たちと、今後法華経を聞くであろう衆生も同様です。迦葉よ。その者たちにもしっかりと伝えるのです」

【真の悟りを得ようと求めなかった憍陳如の懺悔】――

【一九一頁 一行】すると、憍陳如（きょうじんにょ）をはじめとする**五百人の阿羅漢**たちは、受記を得た悦びに歓喜踊躍（かんぎゆやく）し、座から立ち上がって世尊の前に進み出ました。そして額を世尊の足に付けて礼拝し、（『過（とが）を悔（く）いて自（みずか）ら責（せ）む』）／これまで自分たちが至らなかったことを**『懺悔』**しました。

【一九一頁 二行】「（『世尊、我等（われら）常（つね）に是（こ）の念を作（な）して、自ら已（すで）に究竟（くきょう）の滅度を得たりと謂（おも）いき。今乃（すなわ）ち之（これ）を知りぬ。無智の者の如し』）世尊よ。私たちはこれまで単に煩悩を取り除いただけで**《最終的な悟り》**を得たものだと思っていました。しかし今、それが誤りであったということが解りました。私たちは本当に無智でした。／（『我等如來の智慧を得（う）べかりき。而（しか）るを便（すなわ）ち自（みずか）ら小智（しょうち）を以て足りぬと爲（な）しき』）私たちはそもそもが**『仏性』**を具えており、修行次第で**『如来の智慧』**を得ることができる身でありながら、ただ煩悩を取り除くということだけで十分だと捉えていました。本当に浅はかで愚かでありました。世尊よ。ここでこのことを、譬え話を用いて申し上げたいと存じます」

【『衣裏繋珠の譬え・えりけいじゅ の たとえ』】――

【一九一頁 五行】「―― 貧乏で困っている人が親友の家を訪れました。そこでご馳走になり、すっかり酒に酔って寝入ってしまいました。ところが親友は急用ができてしまい、出かけなければならなくなりました。その親友は寝ている友を起こすのも気の毒だと思い、友がこれからの生活に困らないようにと、値（あたい）をつけることができないほど大変高価な『宝石』を着物の裏に縫い付け、そのことを知らせずに出かけて行きました。

【一九一頁 七行】やがて眼が覚めた友はすでに親友が家にいないことを知り、家を発つことにしました。そしてその友は放浪生活をして他国をさまよいました。友は大変苦労し、その日暮らしをして、少しの収入があればそれで満足するという日々を送りましたので、さらに向上を願うことなどしませんでした。自分の着物の裏に計り知れない価値のある『宝石』を持っていながらも、そのことにまったく気づきもしなかったのでした。

【一九一頁 終四行】長い時を経たのち、その友は突然、親友と出会いました。すると親友はみすぼらしくなったその友に向かって言いました。『なんという愚かなことだ。立派な君がなぜ衣食を求めるためだけに生活して、こんなにやつれてしまったんだ。私は君が安楽に暮らせるようにと、私の家を訪ねて来てくれた時、君の着物の裏に計り知れない高価な宝石を縫い付けておいたんだ。ほら。今こうしてちゃんとあるじゃないか』／（『而（しか）るを汝（なんじ）知らずして、勤苦（ごんく）・憂悩（うのう）して以（もっ）て自活（じかつ）を求むること、甚（はなは）だこれ癡（ち）なり』）**『この宝石のことを知らず、日々の生活にあくせくし、苦労したり心配したりして毎日を送っていたとは、本当に愚かなことだ』**と言って、着物の裏に縫い付けている『宝石』を示しました。そして、『さあ、この宝石を売って何一つ不自由のない満ち足りた生活を送りなさい』と言いました。その友はその『宝石』を見て大変喜び、にわかに富裕（ふゆう）の身となり、さまざまな財産を持つようになって思いのままの生活ができるようになりました。

　じつは私どもはまったくこれと同様です。そして世尊はまさにこの親友のようなお方であります。　　――　**【衣裏繋珠の譬え・えりけいじゅ の たとえ】**

【前世の修行と現世の修行がつながっている。『願』は一世のものではない】――

【一九二頁 三行】憍陳如（きょうじんにょ）をはじめとする五百人の阿羅漢たちは言葉をつづけます。

「（『菩薩たりし時我等を教化して、一切智の心を發（おこ）さしめたまいき。而（しか）るを尋（つ）いで廃忘（はいもう）して知らず覺（さと）らず』）　前世において世尊がまだ菩薩であった時、私どもは世尊の教化を受け、一切の智慧を得ようという志を立てることができました。しかし現世に生まれてからはその志をすっかり忘れてしまい、真の智慧を得ようなど考えもしませんでした。／（『既（すで）に阿羅漢道（あらかんどう）を得て自ら滅度せりと謂（おも）い、資生（ししょう）艱難（かんなん）にして少しきを得て足りぬとなす』）　我々は煩悩を除く身となってそれで本当の安穏を得たものだと思っていました。しかしそれは、生活のために苦しいはたらきをして、ほんの少しの収入を得て満足しているようなものでございました」

【一九二頁 五行】「（『一切智の願（がん）猶（な）お在（あ）って失（う）せず』）とは申しましても、一切の智慧を求めるという願いは、私どもの心の奥底でしっかりと息づいており、無くなったわけではありませんでした。世尊が今、私どもを悟らせるために『諸々の比丘たちよ。

お前たちが得た安心の境地とは、**《最終的な悟り》**、本当の涅槃ではないぞ。前世において長い間、仏と成るための徳行の根をお前たちに植えさせて来たのだったが、現世になってその根から芽を出させるための方便として、安心の境地を示したのである。しかしお前たちは、その安心の境地を**《最終的な悟り》**だと思い込んでしまった』とお教えくださいました。世尊よ。このお言葉によって私ははじめて目が覚めました。／（『世尊、我今乃（すなわ）ち知んぬ、實（じつ）に是（こ）れ菩薩なり』） **私どもは、じつは『菩薩』であったということがハッキリと解りました**」

【再び、以上のことをあらためて偈を以て説く】――

【一九二頁 終二行】感激した憍陳如ら五百人の阿羅漢たちは、その思いを**『偈』**に託します。

【(偈)一九三頁 終行】「（『世尊長夜（じょうや）に於て 常に愍（あわれ）んで教化せられ 無上の願（がん）を種（う）えしめたまえり』） これまで私たちは苦に満ちた長い闇路の人生を送っておりました。そして世尊は、そのような私たちを可哀相だと思われて教化くださり、無上の智慧を求めるようにとお導きくださいました。／（『我等無智なるが故に 覺（さと）らず亦知（また し）らず 少しき涅槃の分を得て 自ら足りぬとして餘（よ）を求めず』） ところが我々は無智であるためにそのことを知らず、単に心のとらわれから離れることができただけで《悟り》を得たと思い、『もう、十分に悟った』などと思い込んで、それ以上の智慧を求めようともせずに精進の歩みを止めていました。／（『今佛我を覺悟して 實（じつ）の滅度に非（あら）ず 佛の無上慧を得て 爾（しこう）して乃（すなわ）ち爲（こ）れ眞（しん）の滅なりと言（のたも）う』） ところが仏は我々に**《最終的な悟り》**を得させるために『それは本当の悟りではない。仏の無上の智慧を得てこそ、真の涅槃、**《最終的な悟り》**に達したと言えるのだ』と仰せになりました」

【(偈)一九四頁 三行】「（『我今（われいま）佛に從（したが）って 授記・莊嚴（しょうごん）の事（じ） 及び轉次（てんし）に受決（じゅけつ）せんことを聞きたてまつりて 身心（しんじん）徧（あまね）く歡喜（かんぎ）す』） 只今、こうして私たちは仏さまから成仏の保証をいただき、私どもが仏と成る国の美しさや、無数の人々が次々に授記し、仏に成るということを伺い、私たちはこの上ない感動に打ち震えています」と感謝を述べ、今後の精進を決意したのでした。

◇　◇　◇

雄弁（ゆうべん）と勇気（ゆうき）の人　富樓那（ふるな）

(P16・終 2 行／P12・3 行)

貪着（とんじゃく）は抜出（ばっすい）せよ

(P24・終 2 行／P18・1 行)

われわれの欲望はなかなか完全におさえつけられるものではありません。それを**自己完成(自利)のためと、社会向上(利他)のためのよいエネルギーに転化しさえすれば、**自然に、欲望への貪りや執着から起こる**〈悪〉**は雲散霧消（うんさんむしょう）してしまうのです。

『衆生（しゅじょう）處處（しょしょ）の貪著（とんじゃく）を抜出（ばっすい）したもう』　（一八三頁 終四行 ）

『唯佛世尊のみ能く我等が深心の本願を知しめせり』(一八三頁 終三行)

正法にもとづく説得力

(P29・5 行／P21・9 行)

雄弁とか、弁舌(べんぜつ)とかいうこと～ もっとも根本的な、もっとも大事なことは、どのような弁舌も、雄弁も、**正しい法にもとづくものでなければならない**ということです。

わかりやすいことばを使う

(P32・5 行／P23・9 行)

〈相手にとっていちばんわかりやすいことばを使う〉ということです。

雄弁を養うのは沈黙

(P35・6 行／P25・終 6 行)

ただペラペラしゃべるのが雄弁ではなく、**必要なことだけを完全に、最高の効果をあげるように話すのが、真の雄弁**であるということです。～ 釈尊は～ **必要なときにだけ、必要なことだけをお話しになり**ました。

《思惟のひととき ①》

「『**正法(正しい教え)に基づく説得**』、『**相手にとっていちばん解りやすい言葉**』、『**必要なときにだけ、必要なことだけを話す**』ということが、人に何かを伝える時 (説得する時)、この姿勢が一番大切である」と庭野開祖はお教えくださっています。
―― さて、私が「人に話をするとき」、また「何かを伝える時」、「人に指摘をする時」、以上の事柄を心がけているでしょうか？ 余計なことは言ってはいないか？ 大切なこと必要なこと以外を口にしてはいないか？ 振り返ってみましょう。

空 法

(P40・終 3 行／P29・終 3 行)

「空」ということを簡単にいえば、「この世の全てのものには、他から独立してそれだけで存在し、かつ永遠に変わることのないような本体、**『我』というものなはない」(諸法無我)**というのです。そして**「全ては因縁によって生じ、滅する」**のが**(因縁生起・諸行無常)**、全てのものごとの**『実相』**だというのです。(すべての**存在はただ一つ、同じ存在**である)

そこから「万人・万物は平等であり、仏の慈悲によって生かされて常に大調和しているものである」という仏教の世界観・人生観が生まれるのです。

そして「すべてのものは、等しく**慈悲(一体感)**を持ち、すべてのものと大調和するところに**『究極の安らぎ』**がある」という高い救済観が導き出されているのです。

《思惟のひととき　②》

庭野開祖は「空」の教えを通して「すべてのものと大調和するところに『究極の安らぎ』がある」と教えてくださっています。
この「空」の教えとは、「相手と一体になる」、「相手の立場になり切る」こと。表現を変えると「自分が全く相手と同じならば、自分もそうしたに違いない」と思うことです。そしてその実践によって『大調和』、『究極の安らぎ』を得ることになると教えていただいています。
── さて私たちは日々の生活において、この「相手と一体になる」、「相手の立場になり切る」ことを心がけているか？　振り返りましょう。

四無礙智

(P41・終3行／P30・8行)

「**法(ほう)無礙智** ──　教えの根本である真理に滞りなく通達していること。
義(ぎ)無礙智 ──　教えの内容・意味を滞りなく知り尽くしていること
辞(じ)無礙智 ──　教えを説くのに、適切なことばを自由自在に駆使できること。
楽説(ぎょうせつ)無礙智 ──　以上の智慧をもち、常に自ら進んで自由自在に法を説く。」

富樓那の半歩主義

(P45・4行／P33・4行)

『人・天交接して兩つながら相見ることを得ん』　(一八五頁　終三行)

仏教を心底から理解し、それに帰依すれば、すべての欲望が清らかなものとなって、いわゆる煩悩ではなくなってしまうわけです。
── すべての欲望がそのまま**「清らかな欲望」**になるのです。(P57・終4行／P42・終6行)

『飛行自在ならん』(一八五頁　終行)　(P63・終4行／P47・1行)

仏の境地を悟って、現象の変化へのとらわれから離れて、自由自在な仏の境地に達したということです。(「我のこだわり・とらわれ」がなくなった状態)

法喜食・禅悦食

(P64・4行／P47・終4行)

◎**「法喜食」** 法を聞く喜び　　◎**「禅悦食」** 法を修行する喜び

《思惟のひととき　③》

庭野開祖は『法喜食・ほうきじき・禅悦食・ぜんねつじき』は、信仰者にとっては非常に大切なこと(「大切な食べ物)であると教えてくださっています。
── では私たちは、この『法喜食・禅悦食」を食していますか？　(これらを自らの信仰の支え・活力源としていますか？)　振り返ってみましょう。

『内に菩薩の行を秘し　外に是れ聲聞なりと現ず』　　（一八七頁 三行）

人間として現れる菩薩

（P79・終3行／P60・1行）

『衆に三毒ありと示し　又邪見の相を現ず～　種種の現化の事を説かば　衆生の是れを聞かん者　心に即ち疑惑を懐かん』)』　（一八七頁四行）

《思惟の分ひととき　④》

庭野開祖は「現実には様々な菩薩がいて、人々を悟らせるために、**わざわざ三毒や邪見を現し示す菩薩さえいる**」と教えてくださっています。
── では私は、これまで「嫌な人・私を困らせる人・私を惑わせる人・怒りを覚える人…」を、私を悟らせるための「菩薩」だと見ていたか？　また、そのように見た。とらえたことがあるか？　　振り返ってみましょう。

愚者にして悟った周陀

（P105・6行／P79・終4行）

《思惟のひととき　⑤》

シュリハンドクが悟った「**心の塵・垢、貪る欲・怒り・自分の思い通りに振る舞う(貪・瞋・痴)を払う努力**」というものを、私はしているか？　　振り返ってみましょう。

衣裏繋珠の譬え

（P123・7行／P94・6行）

『而るを汝知らずして、勤苦・憂悩して以て自活を求むること、甚だこれ癡なり』

（一九一頁 終行）

(『この宝石のことを知らず、日々の生活にあくせくし、苦労したり心配したりして毎日を送っていたとは、本当に愚かなことだ』)

本来自分に仏性が具わっていることに気づかず、煩悩が本来人間につきものの存在だと思い込んで、煩悩を除くことばかりにあくせくする努力するのは、本末を転倒している愚かなことだ。（当然、自分の満足や欲望を満たすためだけに毎日を送ることは、さらに愚かなことです）～　とにかく〈自分にそなわっている**仏性を自覚すること〉が、救いに達する一番の近道**であり、それが**仏道の本道**であります。

〈願〉は一世のものではない　(P127・終5行／P98・1行)

『一切智の願猶お在って失せず』(一九二頁六行)

前世の修行と現世の修行のつながりが明白に説かれています。～　我々の修行は今世だけのものではなく、過去世から来世へと成仏をめざして続いてゆくものなのです。～願いを持っていたからこそ、今世こうして遭い難き仏法、特に法華経に遭えることができたのです。

《思惟のひととき　⑥》

「われわれの修行は今世だけのものではなく、過去世から来世へと、成仏をめざして続いてゆくものなのです。～　願いを持っていたからこそ、今世こうして遭い難き仏法、特に法華経に遭えることができたのです」と庭野開祖は説かれています。
――　このご指導をあなたはどう受け止めますか？　かみしめてみましょう。

『佛の無上慧を得て　爾して乃ち爲れ眞の滅なりと言う』(一九四頁 三行)

仏性こそ無価の宝珠　(P139・3行／P107・6行)

われわれは一人残らず**〈仏性〉**を持っているのです。けれども、なかなかそれを自覚できません。なぜ自覚できないかといえば、われわれが**酔って眠りこけているからです。心が眠ったままでいるからです**。われわれは、現象としてあらわれているこの肉体が自分の本質だと思い込んでいます。心はその肉体に付属しているものと思い込んでいます。そこで、ただもう**肉体と心を満足させるために、欲望を追って右往左往し、衣食に追われてあくせく**します。それが**仏性を自覚しないということ**です。

《思惟のひととき　⑦》

無明である凡夫は、**「肉体・体」が自分のすべて（本質）だと思い**、自分の「肉体と心」を満足させるために、欲望を追い、右往左往している人生を送ります。そして、**「仏性」を持っていることを自覚していません。**
――　さて、自分はどうか？　振り返ってみましょう。

縁起の教え　(P141・1行／P108・8行)

我々の肉体も、まわりの境遇も、この世の森羅万象（しんらばんしょう）も、すべて常に確固として実在するものではなく、因と縁が結ばれて生じている**〈仮のあらわれ〉**に過ぎないことを悟ることが、救いの第一歩であると教えられたのです。それがいわゆる**『縁起の法則』の教え**です。

自由と創造こそ　(P143・7行／P109・終7行)

特に人間は、**自由自在**に活動し、**価値あるものを創造していくこと**を、本質としているのです。ですから、その本質すなわち**『本当の自分(仏性)』**というものを、しっかりとつかみ、心の底に確立しない限り、人間としての**本当の生きがい、生きる喜び**は感じられず。従って**真の救い**に達したとは言えません。**お釈迦さまが最終的にお教えになりたかったのは、ここのところなのです**。現象のうえでは大変頼りない身や心であっても、**人間の本質は確固とした『不滅の仏性』**であることを、はっきりと悟らせようとなさったわけです。

生かされているように生きる　(P145・終3行／P111・終4行)

自分の幸せを追い求めるだけでなく、**世のため人のために積極的にはたらき、寂光土を作り出していく、そういう自由自在な活動こそ**が、**我々の本来の姿**なのだということを悟るのです。それを悟ることが**仏さまと一体になる**ことです。～ **〈生かされているように生きる〉**というのは、**自分も人々も幸せにしていこうとすること**です。

あなたも普明如来　(P148・4行／P113・8行)

いかに地位は低くても、頭脳はすぐれていなくても、**世のためになる自分の職業に精を出し**、その人柄や生き方が、**職場や家庭にひとすじの明るさを与える**ようならば、その人は立派な**普明如来**のひとりであります。　(世の中に光明を与え、それぞれの分野で世のためになる**〈価値ある人間〉**なること。そんな人を**〈普明如来〉**というのです)

《思惟のひととき　⑧》

「お釈迦さまがお教えになりたかったのは、『人間の本質は《仏性》である！』ということでした」。

「自分の幸せだけを追い求めるのではなく、多くの人々にとって、世の中全体の救いの道は『仏性を自覚』し、『世のため人のために積極的にはたらくことを悟る』こと。これが『仏と一体になること』です。そして、『世のため人のために生きることが大切なのです』」と庭野開祖は説かれています。

――　では私は、開祖が説くそのような**「生き方」を心がけているか？**　または目指しているか？　いかがでしょう？　振り返ってみましょう。

《思惟のふりかえり　まとめ》

今日の**『五百弟子受記品第八』**の学びを通して、何を学び取ったか？
(何を一番強く感じ、受け止めることができたか？)　かみしめてみましょう。

以　上